

オチー——オチ

オチアヒカハ 落合川 鳳至郡合鹿嶺山から發し、久龜屋嶺で二又川に落合ふ。落合までの流程四軒許。

オチバカキ 落葉掻 百姓持山にして、金澤附近に在る者は、城下の細民こゝに燃料を採取するが故に、往々山林所有者と衝突することがあつた。是を以て天和二年藩は規則を制し、一月六次に限つて何人にも落葉掻を許し、尙當日といへども山林の所有者にあらざれば、鎌又は山刀を携ふるを得ずとした。文政三年にもこの令は尙繰返されてゐる。

オチバカク 落葉掻 一冊。金澤の俳人堀麥水歿後の追悼句集で、阿羅屋の撰に漏れたもの、及び七周忌の手向を集め、隼走庵其叟が編纂し、寛政二年に京菊舎太兵衛から出版したものである。本書には芭蕉堂蘭更の序、著者の緒言、童友の序、垂菊洞八水の跋などがある。その緒言の首尾に落葉かくの語がある所から題號を探つてゐる。隼走庵は又浮梨窟とも記されてゐる。麥水の肖像が載せられてゐることも珍しい。

オチバコウ 落葉考 一冊。金澤の俳人蘭更の編。北枝の評したる十二番句合、芭蕉の解を施した初懷紙の五十韻附合、佳峰等五吟の歌仙に支考の註したもの等があり、諸家の消息及び發句が集められて居る。序は明和辛卯正月半化坊。大坂河内屋茂兵衛板。

オチユウ 尾中 江沼郡廻回に屬する部落。

オチユウケンマケ 御仲間町 金澤の舊町名。元祿頃は御馬屋町と呼び、柿木島御厩橋附近に在つた。厩の仲間共の組地があつたから、御仲間町とも御馬屋町ともいうたのであ

オチユウケンマチ 御仲間町 金澤の舊町名。明和五年七月廿六日夜四半時、法然寺前四辻御仲間町から出火、小家廿八軒焼失、毀家十軒許とある。この御仲間町の名は後に絶えたが、法然寺前四辻といへば上川除町の末で、もと仲間の組地であつたのであらう。

オチヨウキ 御帳木 大聖寺藩で、公簿に登錄し伐採を許さざる老樹巨木をいうた。奥山遊覽記に「眞砂村入口左に柄の大木あり。御帳木なり。」など、見える。

オチヨボガイケ おちよぼが池 金澤城辰巳御櫓の下にあつた井戸をいふ。方言非をさして池といふのである。昔金澤御坊のあつた時、おちよぼといふ女がゐて、朝夕水を汲んだ井で、前田利長時代までこの水を使用したといはれる。

オチンチヨウ 御亭町 金澤の舊町名。川川上新町附近にあつた。昔藩士水野氏の別荘があつた所であるから、この名を得たのであり、御亭跡といふ地も存して居た。文政二年町内の小家を毀ち、そこに定芝居小屋を建築した。

オツキ 御附 御附御歩並・御附物頭・御附御小將などいふ場合は、藩侯の世子附・生母附又は公女で他に嫁したものに附屬する從臣を意味する。

オツギ 御次 藩侯の居る所の次室で、近侍の臣の交番入直する所である。

オツギケイコ 御次稽古 藩侯近侍の臣が勤番中、公務の暇を以て文武の藝を學習するをいふ。

オツギニツキ 御次日記 四冊。一名加州御次日記。前田利家の誕生から、安永八年までの最略日記である。但し慶長十七八年、寛永九年乃至二十年、正保元年乃至四年は今缺本となつてゐる。

オツサカ 越坂 珠洲郡木部郷に屬する部落。九十九灣の北岸に當る。能登名跡志に「新保より越坂へ十五町云々。又吹上といつて越坂の故村あり。山上に有つて九十九灣を見おろし、風景たぐひなし。」とある。

オツサカジヨウ 越坂城 珠洲郡越坂に在つたといふ。越登賀三州志に「堡迹今不詳なれども、越坂村より左の出崎の頭を城端と呼び、夫より此方に城下と呼ぶ地名あり。古へ城ありし時の遺名ならん。一書に太田某居たりといふ。無傳。」と記する。

オツヤノシヨモツ 乙夜之書物 三冊。關

外に關する事實を筆録したもの。上巻一五九條は寛文九年に、中巻一六五條も同年に、而して下巻一八一一條は寛文十一年に成つた。政春これを筆記してその子に與へたが、後前田綱紀に賦するに及び、書名が定まつたものであらう。

オテウヰケ 御手水池 石川郡位川に在つた池。加越能舊跡誌に「位川領の内御手水池と申所有。四間四方程の池と見え候くほき所あり。此池を御手水池と申は、往古明峰和尚近在太平寺村にて禪の時、白山權現御影向あり。右の池にて權現御手水被遊候池と申傳ふ。今は水なく、池の跡有り。權現御影向の砌は、白山より太平寺野邊へ、布幅程の白雲橋に懸り、六月雪降申申傳ふ。」と記する。しかし太平寺村の明峰塚といふものからが既に怪しい。

オテウヰバチ 御手水鉢 能美郡尾流から白山への菰登山路で、北龍馬場から大汝岳に向かはうとする途中にある。徑二米許の大磐石の面が凹んで水を貯へてゐるもので、登山者はそれによつて渴を醫する。白山遊覽圖記に「照嗽處とするものも同じい。古く白山記には「太男知龍磐石上有泉水。上道人受其水一助喉。若初參登不知望之汲此者。尺水忽立大浪。其水悉自上石上振失。人見之大驚發露懺悔者。忽水盈滿如元。」と記されて居る。

オテマハリ 御手廻 三十人組の者をさして御手廻之者といふことがある。御供廻といふは御手廻之者の外仲間・押足輕・御場小者等も惣稱した名である。元祿七年五月御手廻之者を御供廻之者と誤つて書いた爲に、始末書